

## 続々 剣術と剣道の違い

また前回の話の続きである。剣術と剣道の違いを縷々述べていると際限がなくなるので今回で終わりにしようと思う。

まず攻撃部位を述べておくと。まず剣道の攻撃部位は、頭部（面）、前腕（小手）、胴体（胴）、喉（突き）の四か所である。足を切っても、首を切っても、胸を切っても有効な攻撃とは認められない。それがルールだからだ。剣道は試合をすることが前提となっているから、あらかじめ打てばポイントとなる身体の部位を決めておくことが必須である。従って、有効個所を攻撃する技に特化して日頃練習することになるのは致し方ないことだ。

これに対して、古流剣術には本来試合というものはない。何度も言うように「剣術は戦場における刀を使った闘争の技術」という明瞭な目的を持っていて、競技として存在する余地はない。戦う時は戦場における戦闘か、戦場でないとすれば真剣勝負でしかない。それでも江戸時代中期になると実践の場がないので、戦闘の疑似体験として道場における試合（撃剣）ということが流行ったが、この試合がどういふ風に行われたのか勝ち負けをどう決定したのか、ルールはどうだったのか、詳しいことは分からない。いずれにしても攻撃する場所は自由だから、ポイントを争う競技としての要素は希薄だったろう。

剣道は前述した通り打突部位を限定しているから、脚に対する攻撃は想定しておらず、むしろルールとしては違反となってしまう。

幕末に柳剛流という剣術の流派があった。岡田惣右衛門という人が創始した薙刀、杖術を含む総合武術である。この流派の特徴は脚への攻撃。この脛切りの技には各流派とも非常にてこずって江戸の道場は総なめされたらしい。幕末の剣術各派が面や胴、小手など上半身中心の技に特化して、戦場では脚も重要な攻撃箇所であることを忘れた結果であろう。

明治になってからでも、薙刀で不世出の名人と言われた園部英雄（男のような名前だが実は女性）という人は、剣道家相手に連戦連勝、大日本武徳会の大会において当時の名だたる剣道家、槍術家と数百回に及ぶ異種試合（得物の異なる試合）に全勝した。薙刀は脛を払う技が重要な部分を占めているので、脚を打たれることを練習していない剣道家が負けても当然と言えよう。（続く）